

組織目標評価報告書(2019年度)

11

部局名:

農学部

部局長名:

木村 吉伸

目標・取組		目標・取組の実施状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域		
	関連する 年度計画の番号	教育領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
I 入試関連 1 平成31年度 前期日程入試で達成したの志願倍率2.0倍以上を維持する。 2 農業高校を対象とした推薦入試・募集方法Aの志願者倍率を2.0倍以上にするために、県内の校長との意見交換を継続し、推薦入試における英語の外部検定試験の利用を周知させる。	24-1	I 入試関連 1. 今年度は目標値の2.0倍には至らず1.8倍に留まった。入試倍率の隔年変動の結果だと思われるが、一昨年度までの1.7倍程度への落ち込みには至っていないことから、来年度入試の推移を観察して入試改革の成否を検証する必要がある。 2. 農業高校生を対象とした推薦入試(募集方法 A)については、6名の枠に5名の受験者となり、3名を合格とした。県内の農業高校長との意見交換も継続し、英語の外部検定試験の利用を周知したが、目標の2.0倍には至らなかったため、農業高校生の受験を促す独自の国際農学教育プログラムの開発が必要と思われる。
II 教育関連 1 実践型社会連携教育拡充に向け「地域活性化システム論」、「農家体験実習」、「地域農業活性化実践論」、「バイオマス産業体験講座」、農政局との連携による「日本農業論1、2」を開講する。 2 TA, SA制度、学生相談制度、アカデミック・アドバイザー・アシスタント(AAA)制度を活用し、学生支援を強化する。 3 アクティブラーニングの促進、GDP関連英語授業の質向上及びカリキュラム改革に向け、教育関係研修会、授業ピアレビュー等を積極的に推進する。 4 外部・内部評価による教育の質保証のため、保護者との意見交換会、授業評価アンケート、卒業生アンケートを実施、分析し、行動計画を検討する。 5 グローバル人材育成特別コース、EPOK、キャンパス・アジア、GP特別国際コース等の海外留学への学生の参加を奨励し、単位認定を進める。	2-2, 46-2, 50-1 7-1 15-1, 50-1 15-1 15-1	II 教育関連 1. 計画通り、実践型社会連携教育科目を開講し、地域活性化システム論:38名、農家体験実習:6名、地域農業活性化実践論:20名、岡山大学×真庭市 SDGsを目指す産業体験講座:14名が受講した。農水省、農政局と連携し「農業・林業白書」説明会を含めた日本農業論1,2(高年次教養科目)はのべ約200名が受講した。 2. TA, SA制度を活用し授業支援を行った。勉学に困難を持つ学生に学生相談制度(4名)、アカデミック・アドバイザー・アシスタント制度(3名)、担任・指導教員による丁寧な相談・助言・指導(25名)による支援を行った。 3. アクティブラーニングの促進、GDP関連英語授業の質向上に向け、計4回の授業ピアレビューを実施し、カリキュラム改革に向け、教務FD委員会で準備を進めるとともに、ハラスメント防止研修会を実施した。 4. 教育の質保証・向上のために学内外の有識者を招いた教育外部評価会、保護者との意見交換会を実施し、有益な意見、情報が得られた。授業評価アンケートの結果はおおむね良好であった。 5. グローバル人材育成特別コース:5名、GP特別国際コース5名、海外(タイ)農場実習8名、生殖補助医療コース修了5名、インターンシップ単位取得11名があった。海外(グアム)農場実習は新型コロナにより中止となった。
②研究領域		
	関連する 年度計画の番号	研究領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
1 研究実施体制として異なるコースの研究ユニット・異なる学部研究室との共同研究を推進する。 2 公的研究機関や企業および海外大学等の研究機関との交流を促進する。 3 国際誌への投稿、著書の出版、特許取得、国内外の学会発表を推進する。 4 科学研究費申請件数及び採択率、受託研究費受入件数及び金額、共同研究費受入件数及び金額、寄付金の金額を増やすため、外部資金獲得に向けた取組を図る。 5 農学系地域産業の活性化に向けた研究プロジェクト(公開講座・シンポジウム・共同セミナー等)を一層推進する。 6 グローバル化対応に向け、研究力を国際水準に押し上げるため、国際共同研究の推進とともに国際共著論文数・国際共著率、Web of ScienceQ1収録論文投稿数を上昇させる。外国人研究者の教育研究への実質的な参加を促し、共著者に外国人研究者を含む研究論文数の増加を目指す。 7 農学系諸学会との連携を強化し積極的な学会活動を展開し関係省庁との連携も強化する。 8 ARTセンター・資源植物科学研究所・山陽圏フィールド科学センター(FSセンター)を活用した研究活動を推進する。 9 農学部学術報告に各研究ユニットの研究成果をリストアップすることで、学外へ公表するシステムの充実化を目標とする。	27-1	1 環境理工学部、歯学部、理学部及び植物研等との共同研究を推進した。 2 公的研究機関や企業および海外大学等の研究機関として、フエ大学、ノンラム大学、マレーシアプトラ大学、ジョモケニアツタ大学などと交流を促進した。 3 国際誌への投稿、著書の出版、特許取得、国内外の学会発表を推進した。2020年に入るとコロナウイルスの関係で学会発表はほぼみなし発表となった。 4 科学研究費申請件数及び採択率、受託研究費受入件数及び金額を増やすために、科研費の徹底ヒアリングを行い、申請者への依頼を行った。さらに科研費申請書き方講習会を実施した。NPO法人中四国アグリテックと連携し、研究資金獲得に向けた情報を学部内メール等随時周知した。 5 「アグリビジネス創出フェア2019」に2名の教員が出展し、産学官連携に向けた取組を行った。岡山県と11月に野菜・花卉・育種に関する共同研究に向けた情報交換会を実施した。 6 グローバル化対応に向け、アジア・アフリカ諸国の大学等との交流協定を基盤とした国際学術交流を推進した。一例として、アフリカとの共同プロジェクトの成果発表会として農学部でジョイントセミナー(アフリカデー)を開催(12月10日)し、岡大で学位取得後に母国で教員をしている研究者らを招聘した。約100名の参加者があり、30件の研究発表が行われた。アフリカとの共同研究プロジェクトの成果発表会を植物研と共同開催したQ1ジャーナル投稿数も上昇し、国際共著論文数・国際共著率等を上昇させた結果、98編の論文のうち国際共著論文は39編(約40%)となった。 7 農学系諸学会との連携を強化し積極的な学会活動を展開し関係省庁との連携も強化した。 8 ARTセンターとの連携では、東京、大阪、岡山において生殖補助医療技術者のためのリカレントセミナーを実施した。また、岡大病院リプロダクションセンターと共に体外受精ラボの技術指導を行った。資源植物科学研究所・山陽圏フィールド科学センター(FSセンター)を活用した研究活動を推進した。 9 農学部学術報告に研究成果をリストアップすることで、学外へ公表するシステムを充実化させた。
③社会貢献(診療を含む)領域		
	関連する 年度計画の番号	社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
1 FSセンター販売所や各種イベント等での農産物販売を引き続き実施し、一般市民・学生・教職員へ、新鮮で安全・安心な農作物を提供するとともに、農学・農業の重要性を社会へ発信する。また、それらの諸活動を通じ、地域社会への貢献を推進するとともに、地域農業の活性化に努める。 2 「地域活性化システム論」、「農家体験実習」、「地域農業活性化実践論」、「バイオマス産業体験講座」、「中四国大学連携フィールド演習」等の双方向型の講義・実習科目を開講することにより、人的交流を通じた地域活性化に教職員と学生が積極的に関与及び貢献する。また、農学部フェアと同時開催の収穫祭における学生支援を積極的にを行い、学生と社会との交流を推進する。 3 グッドジョブ支援センターとの連携を強化し、引き続き「農業による福祉的雇用の促進」、「福祉的農業の確立」のためのプロジェクトを推進する。 4 農学部及びFSセンター主催の公開講座において、児童・生徒あるいは一般市民に農学のフィールドを実際に体験してもらうとともに、農学部フェア等においても、農学の広報に努める。	46-1	1 FSセンターでは、販売所、農学部玄関、大学生協、天満屋等における農産物販売を継続し、一般市民・学生・教職員に安全・安心な農作物を提供するとともに、オープンキャンパス、ホームカミングデーでの農産物販売も実施した。「農家体験実習」、岡山理科大学・くらしき作陽大学との共同利用実習、「岡大ファームマーケット イン Jテラス」等を通して、地域への情報発信や地域交流を推進し、地域農業の活性化に貢献した。「食と健康の祭典おかやま(表町商店街)」に参加して、大学ブランド農産物の販売により商店街活性化に貢献した。 2 「地域活性化システム論」、「日本農業論」、「農家体験実習」、「地域農業活性化実践論」及び中四国大学連携フィールド演習科目である「牧場実習」、「晴れの国岡山 農場体験実習」等を国・地方自治体・地域農業者等と連携して開講した。地域活性化システム論(農学部シンポジウム)では、「 <u>「学士農業のスズメ」</u> と題して、農業者として活躍する卒業生と農水省後継者担当を迎えて、大学で学んだ座学を生かした「就農」と成功の秘訣について議論を行った。真庭市との連携による「バイオマス産業体験講座」や「地域農業活性化実践論」を開講し、全学の実践型社会連携教育に貢献した。また、大学コンソーシアム岡山の開講科目である「晴れの国岡山 農場体験実習」では、様々な学部の学生を他大学からも積極的に受け入れた。これらを通じて、双方として活躍する卒業生と教職員、学生が地域活性化に主体的に関与した。 3 「農福連携」を推進するため、FSセンターにおける作業補佐員としての障がい者の受け入れと農産物販売のグッドジョブ支援センターへの委託を継続するとともに、天満屋を含むセンター販売所以外での販売も拡大し、「農業による福祉的雇用の促進」と「福祉的農業の確立」を推進した。 4 農学部公開講座「集まれ、ちびっ子バイオ博士」(受講生16名)、FSセンター公開講座「育てて食べよう!おいしい夏野菜 家庭菜園のツボ2019」(同29名)及びジュニア公開講座「岡大ライス博士ジュニアを目指そう!」(同16名)の3公開講座を開催し、地域貢献を推進するとともに農学の広報に努めた。また、農学部フェア・収穫祭や農学部シンポジウムを通して、農学・農業の重要性を社会に発信した。
④管理運営領域		
	関連する 年度計画の番号	管理運営領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
1 教育研究力構築を一層推進するために、若手教員の育成も考慮した人事計画を策定する。 2 ARTセンター教員や異分野融合先端コアから学部に移籍した教員との連携で、学部における異分野融合的な教育研究を活性化させる。 3 WTT教員のテニアクラブ取得に向けたサポート体制を充実させるとともに、新たな女性教員採用やポストアップの準備を行うことで、「ダイバーシティの推進」を加速させる。女性教員数目標値を9名に設定する。 4 留学未経験、あるいは短期間留学教員について、海外の教育研究機関への派遣を支援するとともに、外国人教員等の比率を高めることで英語での講義力の質向上を図り、「GDPプログラム展開」への貢献度を高める。外国人教員数目標値を31名に設定する。 5 法令遵守やハラスメント防止等を徹底するために、研修会や勉強会を開催する。	70-1, 92-1	1 若手教員(40歳以下)の育成を考慮した人事計画を策定し、4名の若手教員(2名女性教員)の准教授へのポストアップ人事を進めた。2名の女性教員はWTTとして採用し、テニアクラブ取得を学部としてサポートした教員である。 2 ARTセンター教員として1名の若手教員(助教)を採用し、動物応用コース「生殖補助医療学」の兼任教員として学部の研究教育の活性化に貢献して頂いた。異分野融合先端コアの教員(准教授)2名が専任教員となり、学部・大学院学生の教育研究に参加することで異分野融合的な教育研究が活性化された。 3 学部としてサポート体制を充実させることで、WTT教員1名がS評価でテニアクラブを取得した。 4 今年度の外国人教員等は44名(GDP異動中の教員2名含む)であり、令和元年度の目標値31名を達成している。 5 令和元年度も定例教授会開催前の時間を利用して法令遵守やハラスメント防止等に関する研修会、勉強会を開催した。 6 新工学部の設立に伴う環境理工学部教員(4名)の農学部への移行に関わる教育・研究体制の整備を進めた。 7 外国人留学生の獲得を目指し、日本語教育による外国人国際農学プログラム(GAP)の構想を立ち上げた。